ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用

日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築

Insights into Japan-related Overseas Artifacts and Documents from 19th-century in Europe, Research and Use: Developing the Foundation for International Collaboration in Transmitting Japanese Culture

NEWS LETTER vol.03 2019.03

2019年1月 ウィーン世界博物館における調査

CONTENTS

■在外資料調査研究プロジェクトの概要……2

■活動報告　ウィーン・チーム
ハインリッヒ・フォン・シーボルトのアイヌ資料の調査……2

■コラム・研究の現場から
ブランデンシュタイン城
シーボルト・アーカイヴ所蔵名刺群に見る、
外交官アレクサンダー・フォン・シーボルトと日独交流……4

■活動報告　イギリス・チーム
イギリスで日本特別展覧会を開催するまでの道のり
その 2……6

■活動報告　スイス・チーム
ジュネーブ市立版画美術館の摺物調査……7

■「シーボルト父子関係データベース」の紹介 ……8

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

人間文化研究機構
基幹研究プロジェクト
NIHU TRANSDISCIPLINARY PROJECTS

在外資料調査研究プロジェクトの概要

国立歴史民俗博物館　日高薫

国立歴史民俗博物館（歴博）では、人間文化研究機構によるネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用」の一環として、2016（平成 28）年度から「ヨーロッパにおける 19 世紀日本関連在外資料調査・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」を推進しています。

このプロジェクトは、ヨーロッパ各地に現存する 19 世紀に形成された日本関連資料の調査をおこなうのみならず、それらをデータベース公開、展示、シンポジウム、教育プログラム（セミナー・ワークショップ・大学教育等）など、多彩な方法により効果的に活用することにより、日本研究や日本文化理解を促進することをねらいとしています。以下にあげる 3 つの異なる地域における異なるレベルの事業を、現地の博物館・大学などとの学術交流協定のもと、共同で展開することにより、日本・現地双方へ成果の還元を図るとともに、日本文化発信の国際連携モデルの構築を目指すものです。

今回のニューズレターでは、本プロジェクトの中心的な活動をおこなっているウィーン・チームから 2 件の調査報告を掲載します。ブランデンシュタイン城における調査は、今年度で 10 年以上、ウィーン世界博物館における調査は 3 年を経過し、ここでご紹介するように多くの成果があがりつつあります。

ウィーン世界博物館と歴博は、この国際研究プロジェクト活動の中間報告として、ハインリッヒ・フォン・シーボルト収集資料に関する展覧会と国際シンポジウムをウィーンで開催すべく、目下準備中です。また、ミュンヘン五大陸博物館では、2019 年 10 月から、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの第二次コレクションに関する企画展示が開催されます。これら海外における展示開催については、次号以降、ご紹介したいと思います。

【ウィーン・チーム】ウィーン世界博物館が所蔵するハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションなど、シーボルトの子どもたちの時代に収集された「もの資料」および文献資料の総合調査をおこない、データベース化、展示等の活用事業へと展開させる《資源基盤型》の調査研究事業

【イギリス・チーム】博物館学芸員や教育普及担当者と共に、現地の実情やニーズに応じた日本展示を各地で実現させるイギリスを対象地域とした《対話型》の日本展示活性化事業

【スイス・チーム】スイスを対象地域とし、現地大学及び博物館との連携による資料調査と展示協力を通じて、国内外の日本研究者の養成を支援する《人材育成型》の大学教育連携事業

ウィーン・チーム 活動報告

ウィーンを中心としたシーボルト（子）収集日本関係資料の調査研究

ハインリッヒ・フォン・シーボルトのアイヌ資料の調査

2017 年 2 月、ウィーン世界博物館に所蔵されるハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold, 1852-1908，以下ハインリッヒと略す）が収集したアイヌ資料の調査に参加させていただいた。今回の調査では、衣服などの数点を除いて彼のアイヌ資料のほぼすべてを調査することができた。調査資料は 76 件（83 点）を数えた。

ハインリッヒのアイヌ資料の調査は、1980 年代にヨーゼフ・クライナー博士（ボン大学名誉教授）を中心とする調査チームによる在西ヨーロッパのアイヌ資料目録化のための調査をのぞけば、大規模な調査はおこなわれていない。日本人研究者チームによる総合的な調査は今回が初めてとなる。

今回の調査で、ハインリッヒのアイヌ資料の約 6 割が生業関係の資料で占められていることが確認できた。これが彼のアイヌ資料の最大の特徴である。さらに、その内訳をみると、農具や漁具は多くなく、弓矢などの猟具で約半数が占められていた。なかでも手弓の矢は 22 本も収集されており、彼のアイヌ資料のなかで最も多い機種となっている。

このような特徴をもつにいたった要因として、まずハインリッヒがアイヌの村に滞在して資料を収集したことが挙げられる。彼は 1878（明治 11）年夏に北海道をおとずれ、沙流川流域の平取を中心に 1 週間ほど滞在し調査と収集をおこなっている。その調査をもとに 1878 年に「アイヌの毒矢」、1881 年に「蝦夷島におけるアイヌの民族学的研究」という論考を発表している。ハインリッヒの先駆的な業績は、大森貝塚をめぐるモース（Edward Sylvester Morse, 1838-1925）との論争などから考古学の分野では広く知られているが、民族学（文化人類学）の分野においても、アイヌについて明確な民族学的関心をもって現在でいうフィールドワークをおこなった最初の外国人と位置づけることができる。このような収集のあり方が、彼のアイヌ資料の特徴を形づくったと考えてよいだろう。

同時に、この生業関係の資料が多いという特徴は、当時のアイヌを取り巻く状況をも反映していると考えられる。ハインリッヒが北海道を

矢（ウィーン世界博物館所蔵）

矢筒（ウィーン世界博物館所蔵）

訪れた当時、アイヌは開拓使により矢毒を用いるアイヌの伝統的な狩猟を禁止された直後であった。そこでは矢毒を用いる狩猟から銃による狩猟への転換が強制的に図られていた。前述したハインリッヒの著作のなかにも、禁止令により弓矢や同じく矢毒を用いる仕掛け弓（罠の一種）が使用されなくなっているという記述が認められる。

民族誌資料に関する一般論として、収集時において日常生活に必要不可欠なものは収集が難しく、不要なものは収集が容易とされる。ハインリッヒのアイヌ資料に、弓矢など矢毒に関わる資料が多く存在することは、このことと無関係ではないだろう。ハインリッヒが抱いていた狩猟民としてのアイヌ・イメージからの影響も無視はできないが、彼のアイヌ資料の背後に、伝統的な生業技術の禁止という当時のアイヌが置かれていた社会的状況が見出せることを強調しておきたい。

ハインリッヒのアイヌ資料は、19 世紀後半の北海道アイヌの生業のあり方や、加速する文化変化の一端を実証する可能性をもっているといえよう。さらに、本稿では触れられなかったが、彼の著作とその挿絵の典拠などの分析から、当時のヨーロッパにおけるアイヌに関する情報や人的なネットワークが明らかとなる可能性も指摘しておきたい。多くの可能性を内包するハインリッヒのアイヌ資料について今後も調査研究を進めていく予定である。

（北海道大学アイヌ・先住民研究センター　山崎幸治）

アイヌ資料の調査風景（櫻庭美咲撮影）

ブランデンシュタイン城シーボルト・アーカイヴ所蔵名刺群に見る、外交官アレクサンダー・フォン・シーボルトと日独交流

2018 年 8 月までに実施されたブランデンシュタイン城シーボルト・アーカイヴでの現地調査で、132 枚の名刺が確認された。ここでは、アレクサンダー・フォン・シーボルト（Alexander von Siebold, 1846-1911）の死後、ブランデンシュタイン城を訪れた 8 枚（8 名）をのぞき、アレクサンダーが所有していたと推定される 124 枚（108 名）を対象に、名刺から垣間見えるアレクサンダーと日独交流の一端を紹介していきたい。

124 枚の名刺のうち 123 枚は、大きさ縦 5.5㎝から 7.0㎝、横 9.0㎝から 12.0㎝で、氏名、肩書、所属、住所が記されており、我々が日常的に用いる名刺と大差ない。また、1 枚は、19 世紀頃に名刺代わりとして世界的に使用されていた、カルト・ド・ヴィジット（名刺判写真）とよばれる名刺判の台紙付き肖像写真である。一部の名刺には、アレクサンダーの著書『シーボルト最後の日本旅行』（1903 年）の寄贈に対する謝辞などのメッセージが余白に書かれているものや、新年の挨拶が名刺の中心に印字されているものもあり（図 1）、自己紹介だけを目的に名刺交換がなされていなかったことは、容易に想像される。

アレクサンダーは、1861（文久元）年 12 月から 1870（明治 3）年 7 月までの約 8 年 8 カ月間、英国公使館に日本語通訳官兼書記官として勤務した。名刺群の中で最も作成年が古いと考えられるのは、「日本帝国パリ万国博覧会事務局名誉局員」という肩書のあるアレクサンダーのフランス語の名刺である（図 2）。アレクサンダーは、徳川昭武遣欧使節に随行し、パリ万博（1867 年）に参加しており、この名刺もその時に作成、配付されたものであろう。氏名の前に男爵（Baron）と印字されているが、アレクサンダーがオーストリア・ハンガリー帝国皇帝フランツ・ヨーゼフⅠ世から男爵（Freiherr）を授与されるのは 1870 年のことであり（図 3）、矛盾が生じる。パリ万博は、世界各国の王族や外交官、政治家が集う外交の場でもあった。すると、外交活動を有利に展開できるよう、男爵を授与されることを予見し、早くから自称していたのかもしれない。

図 1　医学博士松本百之助の名刺（ブランデンシュタイン城所蔵）

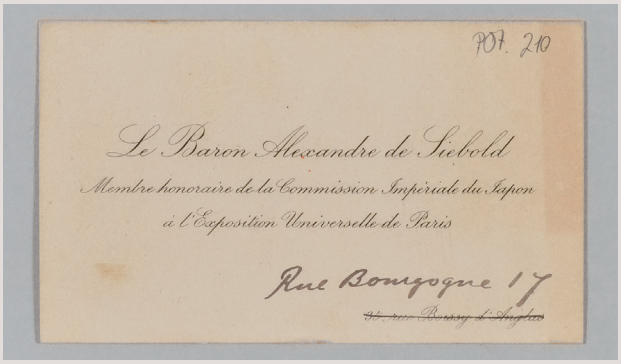

図 2　パリ万博随行時のアレクサンダー・フォン・シーボルトの名刺（1867 年頃作成し、使用か）（ブランデンシュタイン城所蔵）

パリ出張をふくむ英国公使館時代に、国内外の外交官、政治家、官吏と接し、外交交渉に携わることにより、アレクサンダーは、外交官としての基礎を築いた。英国外務省が自国民の日本語通訳官を養成できるようになり、英国公使館内での出世の道が断たれると、みずから英国公使館を退職し、1870 年 7 月 31 日に厚遇をもって民部省雇に転じた。後年、アレクサンダーは『欧州国際法への日本の加入』（1900 年）の中で、日本の近代化の「長年の生き証人、そして為政者から最初に特命をうけた助言者」と自称したが、民部省から大蔵省、外務省へと異動しながらも、伊藤博文、青木周蔵、井上馨・勝之助父子らとともに、1911（明治 44）年 1 月に病没するまでの約 40 年間、外交の第一線にいた。

アレクサンダーの日記（Vera Schmidt〔Hg.〕, *Alexander von Siebold: Die Tagebücher*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag 1999.）や書簡等を分析すると、明治政府に在職中の約 40 年間に、アレクサンダーが日本に滞在していたのは、わずか 4 回、推計 4 年 9 カ月に過ぎなかったことが分かる。名刺に残された肩書や所属、交換の際に書き加えられた日付から、名刺が作成されたおおよその時期を類推できるが、シーボルト・アーカイヴ所蔵の名刺群の場合、一部をのぞき、おおむね 1870 年代以降、すなわちアレクサンダーが明治政府外交官に転じて以降のものと考えられる。また、後述するように、日本人の名刺が圧倒的に多いが、いずれもヨーロッパに駐在する外交官やドイツに留学していた学識者であった。総じていえば、現存するアレクサンダーの名刺は、ヨーロッパ滞在中にアレクサンダーの手に渡ったと見なすのが適当である。

さて、名刺に記載された人物の所属国を見ていくと、124 枚のうち約 7 割に相当する 84 枚が日本、続いて 22 枚がドイツである。また、外交官（45 枚）、公使館付武官をふくむ職業軍人（22 枚）、官吏（14 枚）の名刺が過半数を占める。そして、12 枚（11 名）という日本人医師の名刺の多さは、我々の目を引く。おそらく、ドイツに留学した日本人医師たちは、鳴滝塾を開き、西洋医学を日本人に教授したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）の長男、すなわち「シーボルト二世」に一目会いたいと願ったのであろう。こうした日本人医師との交流の中でも、とくに注目すべきは、日本におけるフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト研究の嚆矢である、『シーボルト先生其生涯及功業』（1926 年）の著者の精神科医呉秀三である。アレクサンダーの日記によれば、1897（明治 30）年 10 月 2 日、3 日、ウィーン大学に留学中であった呉は、ベルリン大学に留学中の解剖医鈴木文太郎とイエナ大学に留学中の精神科医山本宗一をともない、ヴュルツブルクのアレクサンダーの自宅を訪ねた。残念ながら、鈴木、山本の名刺は現存しないが、おそらくこの時、呉はアレクサンダーにみずからの名刺を手渡したのだろう（図 4）。ドイツでのアレクサンダーとの交流は、呉のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト研究にどのように昇華されたのだろうか。

名刺群には、氏名しか記載されていないものや、「Kagawaken Nippon」、「Tokyo」とだけ記されているものもふくまれており、これらには、アレクサンダー本人が肩書や住所を書き加えた（図 1）。また、アレクサンダーの依頼によるのか、名刺の裏面に漢字で自署がなされているものもある。同一人物から複数の名刺を受領している一例として、ここでは、児童文学者巌谷季雄（小波）にふれておきたい。巌谷の名刺は、雑誌『少年世界』、『幼年世界』の編集長時代（1900 年 1 月頃に作成か）とベルリン大学東洋語学研究所日本語講座講師時代（1900 年 9 月から 1902 年 9 月まで使用）の計 2 種類、3 枚が現存する。白百合女子大学児童文化研究センター所蔵の巌谷の「伯林日記」によれば、巌谷は 1900（明治 33）年 12 月 16 日に「有名なるシイボルト氏の息ニして目下日本公使館の枢密顧問官」であったアレクサンダーを訪ね、これ以降、交友を深めていった。帰国後に巌谷が出版した『洋行土産』（1903 年）には、「既に有名なシイボルト男、この人は父と共に、維新の前に日本に渡つて、日本に廿十八年居り、發音と云ひ、頗る日本語の巧みな人、眞に日本人を欺く許りであるが、今以て本は讀む事が出來ない。今に始めぬ事であるが、實に日本の文字ほど、あゝ、不便なものはあるまい」と紹介されている。さらに、アレクサンダーの招きでドイツ人家庭のクリスマスの祝い方を肌身で学んだとあるが、「伯林日記」からもこの 1900 年 12 月 25 日の様子が分かる。巌谷は、シーボルト家で催されたクリスマス会に招待され、アレクサンダーの子供たちに日本の玩具を贈り、アレクサンダーからは童話の書籍を 2 冊、贈られたという。なお、巌谷は出会って間もないアレクサンダーに、「お伽噺」を贈ったこともあった。アレクサンダーと日本のメルヘンの父である巌谷の間で、いったい、どのような日独両国の童話・お伽噺が交換されたのか、非常に興味深い。

これ以上に注目すべきは、巌谷の名刺の裏に鉛筆で書かれた、「T. Minobe　美濃部達吉」という自署である（図 5）。のちに天皇機関説によって有名となる美濃部は、比較法制史研究を目的に、1899（明治 32）年 5 月から 3 年間の予定で、文部省よりドイツ、フランス、英国への留学を命じられた。だが、実際には、東京帝国大学法科大学助教授に任じられ、わずか 1 年あまりで帰国の途についた。巌谷と美濃部は、ドイツに滞在する日本人、日本に興味をもつ、あるいは日本に滞在経験をもつドイツ人の相互交流組織としてベルリンに存在した和独会を通じて知り合った。さらに巌谷は、自身が主催する和独会から分派した俳句同好会に美濃部を誘った（巌谷大四『波の韲音――巌谷小波伝――』文春文庫、1993 年）。残念ながらアレクサンダーの日記には、美濃部の名はいっさい登場しない。おそらく、月に二度ほど開かれていた和独会の定例会の場で、巌谷は美濃部をアレクサンダーに紹介したのだろう。だが、美濃部はあいにく名刺を持ち合わせておらず、巌谷が差し出した名刺の裏に、みずからの名前をしたため、手渡したに違いない。

美濃部の自署が残され、アレクサンダーの手に渡った巌谷の名刺は、まさに和独会の縮図であり、19 世紀末のベルリンにおける、日本人とドイツ人の相互交流の実態を如実に表す、第一級の資料である。1866（慶應 2）年から 1911（明治 44）年まで書きとめられたアレクサンダーの日記には、身分や職業、国籍を問わず、約 3600 名の名前が登場する。今回は、名刺群の一部しか紹介できなかったが、ほかにも、三国干渉を行なった第 3 代ドイツ帝国宰相クロートヴィヒ・ツー・ホーエンローエ＝シリングフュルストや、ドイツ留学中の近衛篤麿、駐英公使時代の加藤高明、フランス公使館付武官時代の明石元二郎らの名刺もある。名刺群のみならず、関係者の日記や書簡等を中心とした文字史料との複合的な分析を行なうことにより、アレクサンダーを中心とした、日本とドイツに広がる人的ネットワークの解明の一助となり得るであろう。

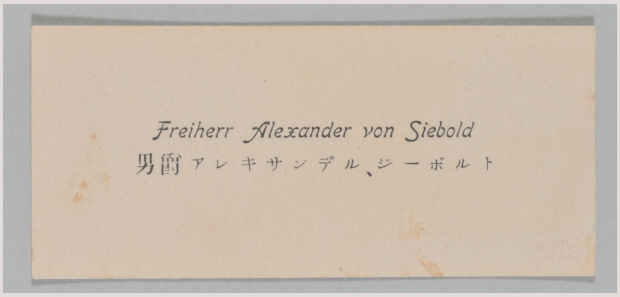

図 3　男爵アレクサンダー・フォン・シーボルトの名刺（1870 年以降に作成し、継続的に使用か）（ブランデンシュタイン城所蔵）

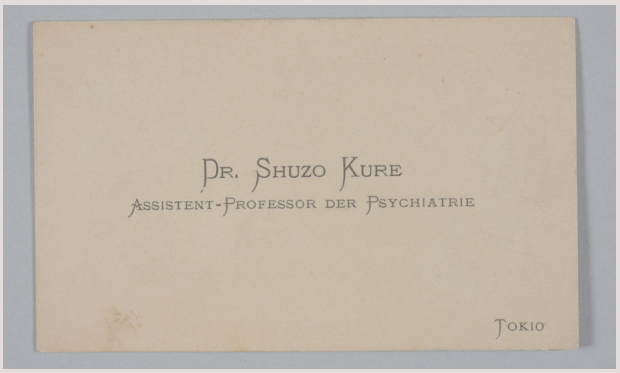

図 4　呉秀三の名刺（1896 年 4 月以降に作成し、使用か）（ブランデンシュタイン城所蔵）

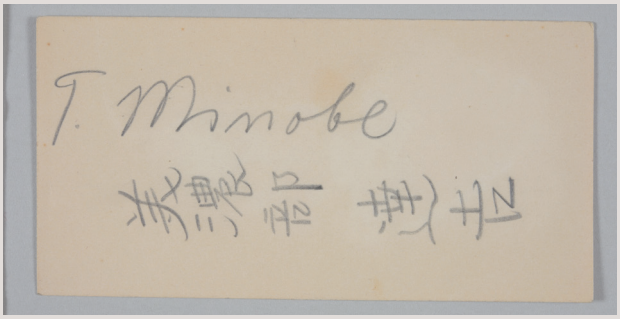

図 5　巌谷季雄の名刺の裏に残された、美濃部達吉の自署（ブランデンシュタイン城所蔵）

本研究は、JSPS 科研費・研究活動スタート支援「『独日関係の黄金時代』における日独交流組織『和独会』の活動実態に関する研究」（課題番号：17H07102　研究代表者：堅田智子）の助成をうけたものである。

（上智大学文学部特別研究員　堅田智子）

イギリスで日本特別展覧会を開催するまでの道のり　その 2

前回は、ウエールズで日本資料の調査に始まり特別展覧会の開催までの経緯をお話した。調査でこの国の各地で 17 世紀以来日本資料が大切に保存され、今も地元で愛されているのが実感できた。首都カーディフのウエールズ国立博物館で展覧会を開いたのは、これらの資料を一堂に会して国民の皆さんに誇りに思ってもらえたらと考えたのが大きい。また展示することで日本コレクションの現地での認知度を高め、今後資料が活用される道を開きたいのと、この機会に初めて日本文化に出会う人々に、日本への興味を喚起する願いもあった。

展示の構成とそのデザインを決めるのに、現地のスタッフと 2 年以上を費やした。ギャラリーに入ると、17 世紀にチャーク城に入った漆の長櫃と、ホンダの小型車が目に飛び込んで来る。細やかな装飾と意匠を凝らした大型の漆器と、1970 年代に輸出され欧州で強い印象を与えた小型車が並んでいる。続いて 19 世紀以降のウエールズと日本の文化交流の軌跡を、両国を行き来した人と資料でたどった。次には超大型画面で現代の人々の暮らしを映し、周りを商業デザイン、ファッション、近現代の工芸などで固めた。漆を用いたアイフォーンカバー、ソニーの AIBO、マンガなどは、日本のコレクターからの借用や、資金調達して購入もした。今の日本を展示するのも重視した。続く展示室では、歴博所蔵の江戸図屏風、版画、小袖、漆器に加え、共催の文化庁の尽力で東京国立博物館、東京国立近代美術館の陶磁器や刀剣、青銅器がならんだ。

これまでイギリスでの講演や展示活動を通して、この国の各地に日本美術愛好者がいるのがわかった。彼らはどこで展覧会が開かれようと探して見にきてくれる。この展覧会では初めて日本文化に出会うお客様を重視したが、彼らにも満足してもらえるよう工夫をしたつもりだ。準備

展覧会オープニングレセプションの招待客

の期間中、現地の来館者との対話や観察を通して、お客様がこの展覧会で何を見たいか、知りたいと思っているかを学び特定していった。特に現地の日本資料では、ウエールズと日本の交流を直接に伝える「よい物語」がある資料を探した。これらは来館者から強い支持を受けた。

より多くの方が展覧会に足を運んで直接日本文化を体験してもらうため、オープン前には、学校、商工会議所、日系企業の工場を手分けして回り、展覧会の告知と日本文化紹介に訪ねた。そこでは現地で活動するジャパン・ソサエティや国際交流基金のスタッフの協力を得た。オープン直後にはイギリス王室からチャールズ皇太子が見にきてくださった。12 週間の会期中は連日盛況で最後まで入館者の勢いが衰えなかった。人口 30 万のカーディフ市で 5 万 9 千人を動員した。アンダーソン館長によれば、この夏カーディフでは日本展が一番の話題だったという。

歴博では久留島館長、同僚や事務方の皆さんから強い支援をいただき、わたしは準備に専念できた。ウエールズ国立博物館、鶴岡公二大使と駐英日本国大使館スタッフにも支えられた。資金調達に加えいくつもの高いハードルを越え、展覧会を成功裏に終えられたのは人の輪に支えられたからだ。心からお礼を申し上げたい。

（国立歴史民俗博物館客員教授　三木美裕）

チャールズ皇太子を案内する

日本特別展 "KIZUNA Japan Wales Design"

ジュネーブ市立版画美術館の摺物調査

ジャポニスムの流行などを背景に、ヨーロッパの主要美術館にはたいてい、相当な点数の浮世絵版画のコレクションが蓄積されている。ジュネーブ市立版画美術館（Cabinet d'art graphiques du Musée d'art et d'histoire de Genève) もその例外ではない。

この浮世絵コレクションは長く忘れられた存在であったが、同館とチューリヒ大学、立命館大学の共催事業として、2014 年の 10 月から翌年の 1 月にかけ、"The frozen gesture" のタイトルで、同館所蔵の役者絵コレクションの企画展がジュネーブで開催され、和本を模した豪華な図録も制作された。展覧会タイトルは、演技の節目で歌舞伎が一瞬静止して観客の目を引く姿態を取る、いわゆる ' 見得 ' を意識したものである。役者絵の展覧会は日本国内においても観客の動員を見込みにくいとされるが、この展覧会は大変好評で、スイスにおける日本文化への関心の高さを垣間見せるものであった。

同館学芸員のクリスチャン・リュメリン氏によれば、この展覧会の監修者のひとりで、同館所蔵の日本版画を悉皆調査された立命館大学の赤間亮教授が摺物のコレクションがなかなか充実していることを指摘し、同館はこのコレクションの活用を模索することになったという。

摺物とは、錦絵と同じく多色摺の木版画であるが、錦絵が市中の絵草紙屋で不特定多数の人々に販売される商品であるのに対し、関係者の間に無償で配布されるものである。江戸では狂歌のグループが詠んだ自作の狂歌を正月に知人の間に配ったもの（歳旦摺物）や、襲名祝いの会の案内や音曲の催しのプログラムなどが多く、たいていは浮世絵師が描いた絵が添えられている。江戸の摺物、とくに狂歌摺物はその精緻な彫りや摺りの美しさから欧米での人気が高く、明治以後、大量に流出しており、展覧会の開催や画集・研究書の刊行も盛んである。充実したコレクションの少ない日本国内でも、近年ようやく関心が高まりつつある。

一方、ジュネーブ市立版画美術館の摺物コレクションには、こうした江戸の狂歌摺物ではなく、上方の俳諧摺物が多いことが特色である。世界的にもまとまったコレクションの存在があまり知られていないこともあり、上方の俳諧摺物に関する研究は江戸の狂歌摺物に比べると立ち後れている。日本国内では、俳諧史と絵俳書や一枚刷の研究者として知られた故雲英末雄氏の研究があり、その収集の一部は早稲田大学のホームページで紹介されているが、世界規模で見ても展覧会の開催や研究書の出版は多くない。

歴博の在外日本関係資料の共同研究員で、スイスにおける調査で大きな役割を担ってくださっているチューリヒ大学のハンス・トムセン教授（"The frozen gesture" 展の監修者のひとりである）の仲立ちで、私を含む歴博メンバー 3 名は 2015 年 3 月に同館の収蔵施設を訪問し、浮世絵版画と俳諧摺物の一部を拝見した。その折りに、将来的な同館での展示も視野に入れて、調査の協力を依頼されたのである。ジュネーブ市立版画美術館の俳諧摺物は、その画像が同館のデータベース上でも公開されているが、状態がきわめて良好である。これがウェブ上ではなく、実際に展示に供されることの意義は大きいが、その前にはいくつかのハードルが存在する。

ジュネーブ市立版画美術館所蔵の俳諧摺物には大型の判型のものが多いが、そこに収録される発句の数は膨大で、翻刻と翻訳に相当な時間を要する。また、著名な浮世絵師が描く江戸の狂歌摺物と異なり、絵は詳細の不明な絵師の手によるものも多く、美術史的なアプローチも容易ではない。現在は発句の翻刻をほぼ終えて、トムセン教授のもとで英・仏語への翻訳が進められている。並行して絵を描いた絵師に関する調査も進めている。同館は 2021 年頃の展覧会開催を視野に入れているが、そこにむけては近世文学史の研究者の協力も必須となるだろう。

（大久保純一）

「シーボルト父子関係データベース」の紹介

歴博では「データベースれきはく」において「シーボルト父子関係資料データベース」を一般公開している。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトとその息子たちに関し、ヨーロッパの各地に分散して残っている貴重なモノ資料や文献資料を、幾つかの主な収蔵先について一括検索できるデータベース（以下、DBとする）である。

シーボルトは1820年代と幕末（1860年代）の二度にわたり来日したが、いずれの際も膨大な日本文物コレクションを収集し、ヨーロッパに持ち帰った。二度目のコレクションは現在、ドイツ・ミュンヘンの五大陸博物館に所蔵されており、歴博では在外日本関係資料調査プロジェクトの一環で、このコレクションの悉皆調査を行ってきた。
その調査成果が、このDBでは第一に公開されている。内容は、2016年実施の企画展示「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」で紹介したように、江戸後期の日本の美術品や仏像、工芸品、武具、書籍、生活雑貨などを集めた多種多様なコレクションである。DBではそれらの画像付き詳細情報が、所蔵先の許可を得て、館外からも制限なく検索・閲覧できるようになっている。

シーボルトについては、膨大な文献資料（史料）もドイツに残っており、本DBではその主要な史料群の目録も検索することができる。内容は主に、シーボルトが生前に各方面とやり取りした書簡類や、『日本』などの出版物に絡む草稿、彼の生前の様々な企図に関する覚書やメモ類、同時代の新聞記事ほかである。これらの多くは現在、ドイツのシーボルトの末裔が住むブランデンシュタイン城とボーフムルール大学図書館とに分散して残されており、DBではそれらの目録が公開されている。なおこれらは、歴博館内から検索すると、実際の史料の画像がリンク付けされており、上記の所蔵者の許可を得て、史料画像が閲覧できるようになっている。研究上の目的であれば館内から閲覧が可能であり、希望の場合は歴博総務課情報システム係（joho@ml.rekihaku.ac.jp）までお問合せいただきたい。

DBは現在も更新・拡充を進めている。例えば、ブランデンシュタイン城所蔵史料のDBは、日本語・ドイツ語バイリンガル化を進めており、2019年度内には両言語での検索が可能になる予定である。またシーボルトの息子で明治日本と深い関わりを持ったアレクサンダーとハインリッヒが集めたコレクションや遺した史料は、DBでは現在一部をカバーするのみであるが、ブランデンシュタイン城やオーストリア・ウィーンの世界博物館に残るそれら史資料の調査も現在進行中であり、本DBではその成果も順次公開していく。

図1：シーボルト父子関係資料DBトップページ
https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/pfvs/db_param

図2：シーボルト父子関係資料DBでミュンヘン五大陸博物館のモノ資料を検索した画面

発行日：2019年3月31日
編集・発行：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用－日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築－」プロジェクト 総括班
デザイン：株式会社デザインコンパス
画像提供：Weltmuseum Wien, Brandenstein-Zeppelin Family Archives

ホームページ：http://e-zaigai.jp/
国立歴史民俗博物館
〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地　Tel.：(043)486-0123（代表）

つなげる × ひろげる × つたえる↔みつける
博物館型研究統合